2005年8月10日発行（毎月1回10日発行）●SJ389号
Monthly The Safety Japan
Sj
人とクルマのいい関係をめざして

8
2005 AUGUST
●編集室：〒351-0188 埼玉県和光市本町8-1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 048(452)0304
●編集人：河野光彦
●年間購読料：1200円（定価1部100円・消費税込）
※郵便振替 口座番号：00170-7-173273
※加入者名：㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係

今月のスポット

4社で共同して、一定レベルの教育、活動を行うことに安全協議会の意義がある。また、お互いの良い所や活動を学ぶことができている。

（特集より）

CONTENTS

特集：プロドライバーの安全――ホンダ輸送グループの安全活動 ……❶
プロドライバーとしての自覚、誇り、実践的活動
TRAFFIC ADVICE ……❹
●宇都宮ヤクルト販売（株）／三輪スクーターの運転特性を理解し社内で的確に指導するために
SAFETY REPO ……❹
●本田技研工業（株）関西法人営業所／『意識の脇見』の危険性を体験してもらい、企業の交通事故防止に貢献
TOPICS ……❹
●Enjoy Honda MOTEGI 2005／Hondaのファンが集うイベントで交通安全を広める
●活動短信／交通教育センター7月
OPINION ……❺
●高山俊吉／「注意しろ」「危険には近づくな」の押しつけ教育から内発的に注意するきっかけづくりの教育へ
VOICE ……❺
DOCUMENT EYE ⑱⑥ ……❻
●車両および歩行者の踏切の通過状況を観察する

特集●プロドライバーの安全――ホンダ輸送グループの安全活動

プロドライバーとしての自覚、誇り、実践的活動

写真上／管理監督者研修交通安全教育プログラム「あやとりぃ」のもよう
写真中央／ホンダ輸送グループの1つ、ホンダ運送（株）でキャリアカーに乗務する瀬川孝司さん
写真下／交通安全標語・ポスターの表彰を行うホンダ輸送グループ安全協議会の根本忠男会長

物流を担う運送業界では、どのようにドライバーの安全意識を向上させ、交通事故防止や社会貢献を行っているのだろうか。Honda製品の輸送を手がける日本梱包運輸倉庫（株）、ホンダ運送（株）、（株）ホンダ・エクスプレス、（株）光明の4社が作る[※1]ホンダ輸送グループ安全協議会の事故防止のための活動を取材し、その効果を探る。

7月26日午前9時30分、鈴鹿サーキットホテル・ハーモニーホールで、ホンダ輸送グループ安全協議会が主催する管理監督者研修が開かれた。これは、輸送会社の社会的責任として「交通安全」「品質向上」「環境運転」に対するモチベーションを高める教育手法の習得を目的として、昨年から実施されている。今回の研修では、交通安全教育プログラム「あやとりぃ」[※2]を使い、「幼児、小学生、高齢者の行動特性」を知り、危険を予測した運転を学ぶという内容で、乗務員等を管理する91名が参加した。

はじめに、同安全協議会の根本忠男会長が「ホンダ輸送グループは、地域社会やお客様に迷惑をかけない運転をこころがけ、ホンダ輸送グループとその協力会社が一体となって、加害事故0件、被害事故0件の交通事故『ゼロ』をめざしています。今日の研修では本田技研工業（株）の安全運転普及本部が展開している交通安全教育プログラム『あやとりぃ』から、幼児、小学生、高齢者の行動特性を知り、学んだことを職場や家庭に戻って、交通事故を未然に防ぐための活動に役立てていただきたい」と挨拶した。

研修では、まず「あやとりぃ」を開発した本田技研工業（株）安全運転普及本部鈴鹿モビリティ研究会の藤村哲也事務局長が、同研究会が鈴鹿市の事故分析を基に交通安全教育プログラムの開発・普及、指導者の育成などを行っていることを説明。続いて、同じく相浦和則主任が、鈴鹿市では教育現場の実践から作られた「あやとりぃ」を導入したことで、小学生の事故が減少していることを紹介し、「子どもの交通安全教育について」をテーマに講演した。

※1ホンダ輸送グループ安全協議会＝本田技研工業（株）の製品輸送に関わる4社で構成され、交通事故を絶滅させるため、安全運転の啓発と意識高揚のための教育・指導・広報活動を行っている。
※2あやとりぃ＝「あんぜんを、やさしく、ときあかし、りかいしていただく」の略称で小学3～4年生を対象に教え込むのではなく、子どもたちに考えさせて気づく能力を育む交通安全教育プログラム。小学3、4年生の授業で活用されている。「あやとりぃ」をはじめ、幼児用の「あやとりぃ ひよこ編」、小学生向け「あやとりぃ 自転車編」、さらに高齢歩行者の自転車利用者向け「あやとりぃ 長寿編」が開発されている。

「交通安全とは、安心できる、危険にあわない、ということ。そのために『止まって確かめる』ことが基本。私たちは、それを子どもたちに教えています。これができると、子どもの事故は減ります」。次に、子どもの行動特性を説明する。「男の子の3人に1人は道路を走って渡ります。信号では、1度止まる、安全を確かめるという知識はもっていますが、行動が伴わない。つい、飛び出してしまう。行動につなげるには、子どもたちにトレーニングを繰り返し、繰り返し行うことです」。次は予測がつかない子どもの行動について。「青信号が点滅を始めた！えっ！あわてて引き返してしまう。この現象は高齢者にも見られます。自転車に乗っている子どもによく見られるあわてた運転は、おいてけぼりはいやだよ、という気持ちがあるから。止まらないで、『動きながら、安全確認』をします」。では、なぜ、子どもは止まらずに走るのか？「子どもの発育中の心は、走らないと気がすまない、動作本位なのです。子どもには、どうして止まらないといけないのか教えなければいけません」。例えば自転車では、止まって物を見るのと、動きながら見るのでは、止まって見る方がよく見えること、広く見えること、そしてよく聞こえることを理解させることが大事で、「子どもたちは、自転車で体験しながら教えると納得してくれます」とアドバイスする。

間帯別交通事故発生件数から見た事故の特徴、飛び出し、安全不確認など子どもの事故をデータに基づいて分かりやすく説明し、研修を終えた。

受講した㈱光明の坂本登さんは16歳、14歳、9歳の子どもを持つ親。「とくに自転車に乗る時の子どもの行動特性や事故の特徴が参考になりました。子どもたちは自分の感覚だけで自転車に乗っているので、今日のことを子どもたちに教えようと思っています。職場に帰ってからは、毎日の朝礼で子どもや高齢者の行動特性を伝え、ドライバーに注意を促したい」と話す。同じくホンダ運送㈱の笠井真一郎さんも4歳の息子の親。「子どもの目線で考えることの大切さを学びました」という。「大人と違い、子どもの視野が狭いことを我々プロドライバーは考えて運転しなければならないと思います。子どもの行動特性をドライバーは理解し、職場だけでなく、家庭に持ち帰って伝えていかなければと思います」。職場だけでなく、家庭を含めた交通安全活動を進める安全協議会にとって意義ある研修になった。

ドライバー研修では、鈴鹿サーキット国際レーシングコースを利用しての高速制動（写真右上）、すべりやすい路面での制動（写真中央）などを参加者が体験した

家族で安全を考える 交通安全標語・ポスターの表彰

管理監督者研修の後、昼食をはさんで、同じハーモニーホールで、交通安全標語とポスター入選作品の表彰式が開催された。標語の部では応募者数4366名、作品数5277点から、最優秀賞各社1名、優秀賞各社3名、ポスターの部で応募者数220名、作品数221点から、最優秀賞1名、優秀賞各社1名、優良賞・子ども作品賞各社1名が表彰された。前年を上回る応募から選ばれた最優秀賞の標語は次のとおり。

●「気をつけて　慣れたこの道いつもの時間　心の油断に危険あり」
（日本梱包運輸倉庫㈱・牛田和秀）

●「同じ道　時間が変われば　違う道　気持ちを緩めず　危険予知」
（ホンダ運送㈱・宮崎新）

●「ハンドル握る手　家族の手　心は一つ安全運転！」
（㈱ホンダ・エクスプレス・小城美恵）

●「とまってくれて　ありがとう　小さなこの子に　大人の見本」
（㈱光明・工藤謹司）

この最優秀賞の標語は「のぼり」にして、9月から行われる秋の全国交通安全運動から1年間、全社で掲載する。また、ポスターの部は、「ただいまと　無事の帰りを待つ家族」（ホンダ運送㈱・平琢磨）が最優秀賞に輝いた。子ども作品賞には、西川智貴（日本梱包運輸倉庫㈱）、細井千暉（ホンダ運送㈱）、田中千翔人（㈱ホンダ・エクスプレス）と小野雅貴（㈱光明）、が選ばれ、西川さん（1面写真下）と田中さんが表彰式に臨んだ。

実践的トレーニング― ホンダ輸送グループ安全協議会ドライバー研修

管理監督者研修、表彰式に先立って、25日から27日の3日間、鈴鹿サーキット交通教育センターで、ホンダ輸送グループ安全協議会のドライバー研修が開かれた。1日目の課題はブレーキコースでの制動。60㎞／hで走行して、指定されたポイントを通過したところで、足をアクセルペダルからブレーキペダルに移し換えて、しっかりとブレーキペダルを踏み込みABSを作動させる。速度を70㎞／h、80㎞／hと上げて、同じ練習を繰り返し、1日目は終了した。2日目は、午前7時から高速制動のトレーニング。鈴鹿サーキット国際レーシングコースを1人5周し、メインストレートの部分を使って、100㎞／hからの制動を1回、110㎞／hと120㎞／hでの制動を2回ずつ行う。参加者は高速度域でも、安全に停止できるブレーキングを練習する。9時、交通教育センターに戻り、参加者は通常の濡れた路面と、さらにすべりやすい路面での乗用車とトラックの挙動、制動の違いを体験した。午後も、乗用車とトラックの両方で回避訓練などを行い、2日目は終了。

3日目は国際レーシングコースで高速走行や、教室で危険予測トレーニングが行われ、3日間の研修は終わった。

参加した㈱ホンダ・エクスプレスの奥山雅巳さんは、鈴鹿サーキットの国際レーシングコースを利用した高速制動が印象に残っているそうだ。「普段、できないことを体験できたのが良かった。120㎞／hから急ブレーキをかけたのは、初めての体験でしたから。雨でコースが濡れていましたが、安全に停止できるのはABSのおかげであることもわかりました。安全運転研修は数回参加しましたが、他社と合同のものは初めてです。他社で同じ仕事をしている方々と意見交換ができて、とても刺激になりました」と納得の表情だった。「緊急時はブレーキを強く踏み込まないと、その性能をフルに発揮できないことがわかりました」というのは日本梱包運輸倉庫㈱の樋山重則さん。「ただし、普段私が乗務している大型トラックでは積荷のことを考えると、この研修で練習した急ブレーキを使うような状況にならないように、余裕のある運転をしなければいけない」と、改めて感じたと語ってくれた。

管理監督者研修では、チャイルドビジョン（幼児視界体験メガネ）を使って子どもの視野が大人より狭いことなどを鈴鹿モビリティ研究会の相浦和則主任が説明

余裕を持った運転― プロドライバーにみる一日の運転行動

ドライバーは、ホンダ輸送グループ安全協議会が推進している安全運転指導などを、日々の業務でどのように活かしているのだろうか。ホンダ運送㈱関西営業部鈴鹿事業所の瀬川孝司さん（41歳）の1日を追った。瀬川さんは、1990年にホンダ運送㈱に入社以来、15年間、キャリアカー（四輪車を輸送するトレーラー）を専門に乗

特集●プロドライバーの安全――ホンダ輸送グループの安全活動

務している。

7月14日午前9時30分、鈴鹿市の本田技研工業（株）鈴鹿製作所で生産された完成車が並ぶ本郷出荷センターに、瀬川さんがキャリアカーを運転してやって来た。この日の積荷は、フィット3台、モビリオ・スパイク2台、バモス2台の計7台。キャリアカーにタイヤ止めを設置し、完成車の外装を指差し確認でチェック。完成車の停止位置を確認して、荷台に積み込んでいく。指差しで手順を一つひとつ確認しながらワイヤーで完成車を荷台にしっかり固定する。同じ作業を繰り返して、1時間ほどで7台の積み込みを完了した。この日の運行ルートは、本郷出荷センター（三重県鈴鹿市）→国道1号線→名神高速道路・栗東IC→名神高速道路・茨木IC→（株）デポックス関西（大阪府茨木市）、である。目的地の（株）デポックス関西はお客様に届ける前の納車整備や、販売会社オプション装備の取り付けを行う会社だ。

ホンダ運送（株）では社内規定で、一般道路では最高60km／h、高速道路では最高80km／hで走行することが義務づけられている。また、エンジンの回転数も1600回転以下で走行しなければならない。もし、これらの制限をオーバーした場合は車内に搭載されているデジタルタコグラフ（走行中の速度、距離、時間を記録する装置）から警告音が鳴るようになっている。瀬川さんは、停止状態から発進したら、早め早めにギアをシフトアップさせて、回転数を上げないように運転している。これは、CO_2がクルマの発進時に最も多く排出されるため、それをできるだけ抑えようという取り組みだという。

走行中、キャリアカーは乗用車のような急ブレーキが使用できないため、前車との間に、乗用車が2、3台走行できるくらいの距離をとっている。乗用車のようなフットブレーキの他に、リターダーと呼ばれる補助ブレーキやトレーラーブレーキ（後輪のみに効くブレーキ）を手で操作し、下り坂など状況に応じて使い分ける。また、CO_2削減のために、走行中、エンジンの回転数が常に1100回転を維持できるようにギアを選ぶ。1100回転を維持することで、燃料の消費も必要最小限に抑えられるからだ。「ギアチェンジをこまめにすることで60km／hでも、80km／hでも1100回転をキープします。この運転の仕方が、最も低燃費で走れると思います。このようなエコドライブは余裕を持った運転につながり、結果として安全運転になると思います」と話す。また、「運送業界全体でもエコドライブの普及が進んでいるようで、一昔前と比べると、猛スピードでとばす大型車は減っていて、走行環境は良くなっているのではないか」と感想を語ってくれた。

すべてにおいて安全を優先させる

この日、一般道を走行中、対向車のトラックが道路に落ちている部品のようなものを跳ね飛ばし、それが瀬川さんのキャリアカーの目の前を横切るように転がってきた。いち早く、それを発見し減速。その部品が目の前を通過するのを確認する。走行中は安全運転だけでなく、道路に落ちているものやはみ出している障害物を積荷である完成車に当てないために常に気を配っている。「積荷はお客様が購入した大事なクルマという意識を常に持っている」という。「例えば、山道などで、道路に木の枝などが垂れ下がっていたとします。そのまま通過したら、木の枝が完成車に接触してキズが入ってしまう恐れがありますので、そのような時は、木の枝を避けるように通過します。もちろん、対向車が接近していたら、安全な状態になるまで待ちます」。

12時20分、キャリアカーは滋賀県の栗東ICから名神高速道路に入る。高速道路では、常に80km／h未満を維持して、3車線の中で最も左のレーンを走行。やむを得ず、車線変更しなければならない場合は、周囲に自分の行きたい方向が十分に伝わるようウインカーは早めに出す。このような姿勢が評価され、瀬川さんは、本田技研工業（株）生販物流部より、平成15年度の優良乗務員として表彰されている。13時10分、茨木ICで名神高速道路を出て間もなく、目的地の（株）デポックス関西に予定通り到着。一般道路から歩道を横切って、駐車場に進入しようとした時、瀬川さんは歩道を走る自転車を発見。歩道の前で一時停止して、自転車が通り過ぎるのを待ってから駐車場に入った。完成車を降ろした瀬川さんは休憩を兼ねて昼食をとり、往路と同じルートでホンダ運送（株）関西営業部鈴鹿事業所へと戻っていった。

瀬川さんのモットーは「すべてにおいて安全を優先させる」ことだ。「これはとても難しいことですが、自分があせるような状況を作り出さないようにすることで実現できます。完成車を積む時、降ろす時は、定められた手順を一つひとつ確認しながら、作業を進めます。到着時間が決まっている場合は、2時間は余裕を持って行動します。運転中は運転に意識を集中して、『急がなければ』といったことを考えないようにしています。後方のクルマがあおってきても気にしません。後ろを気にしてしまうと、結果として前方への注意力が低下するので。後輩の若い乗務員によく言うのは、交差点の真ん中で止まってしまっても、絶対にあせってはいけないということ。そういう状況ほど落ち着いて周りを見る余裕を持てと。『運転中は精神状態を一定に保つ』これが安全運転に必要なことです」。瀬川さんには今も大事にしている言葉がある。鈴鹿サーキット交通教育センターの研修で聞いた「運転技術は練習で向上できるが、過労と睡眠不足には絶対に勝てない」というインストラクターの言葉だ。「日によっては、夕方に乗務が終わって、翌日の午前2時、3時に出発という場合もあります。そのような時でも、睡眠は十分にとるようにしています。また、ドライバーは目が大事なので、目にいいと言われる、ブルーベリーや、ビタミンAを多く含んだ野菜を食べるようにしています」。こんな父親なので、自分の子どもにも交通安全についてはうるさく言っていると笑った。

写真上／出発前に積荷の最終点検を行う瀬川さん
写真下／目的地積荷を降ろす時も、慎重に完成車を取り扱う

事故ゼロから地域社会への貢献へ

ホンダ製品の輸送を担う4社が、グループとして安全運転活動に取り組んだのは1971年にさかのぼる。前年に発足した本田技研工業（株）安全運転普及本部の活動に協力して、交通事故ゼロ化を目的に年間無事故競争コンクールを開催したのが始まりで、1971年から毎年、無事故競争を行ってきた。この実績を踏まえ、さらに4社としての活動を推進するために1984年にホンダ輸送グループ安全協議会として正式に発足。運営は4社が2年ずつ交代して持ち回りで幹事会社となり行っている。

物流におけるホンダの安全の考え方を本田技研工業（株）生販物流部製品物流室の渡辺浩一室長は「お客様や社会から信頼を得て存在していくには、新しい価値を提供することや、お客様目線で質を高めることが必要となっています。お客様へお届けする輸送においても、業界トップレベルの安全性と環境性を追求しています。安全面では、積み降ろし作業環境や運搬車輌の安全装置はもとより、乗務員の意識改革が主な活動内容となっています。これらの守るべき活動をホンダ輸送グループ安全協議会が着実に実践することで、結果としてお客様のみならず、地域社会への貢献につながると考えています」と語った。

安全協議会の活動は、ホンダの拠点である狭山（埼玉県）、浜松（静岡県）、鈴鹿（三重県）、熊本（熊本県）の4地区に地区部会を設けて部会ごとに行う活動と、全体で取り組む活動で構成される。全体では、ドライバー研修、管理監督者研修、交通安全標語・ポスター募集・エコドライブマニュアルの発行、年間無事故競争・表彰などに取り組む。今年の幹事会社で、安全協議会会長を務める（株）光明の根本忠男常務は、「4社に加えて、その協力会社も事故ゼロにしていくことが当初からの方針で、1社ではやりきれないことを、4社で共同して、一定レベルの教育、活動を行うことに安全協議会の意義がある。また、お互いの良い所や活動を学ぶことができている」と語る。活動の成果として、「安全意識が無事故競争、家族ぐるみで取り組む交通安全標語・ポスター活動などを通じて家庭にも浸透してきた」ことをあげる。標語では家族に関わる作品が増え、ポスターでは、子どもからの応募が増えていて、5歳の子が作品を出すなど、年齢層も広がっているそうだ。子どもから言われた言葉に親であるドライバーが気をつけるようになる。こうした活動により、事故は確実に減ってきており、加害事故はこの7年間で4件から1件に減少。しかし、課題もある。被害事故が一昨年の7件から増えていることだ。昨年は追突など15件。これについては、追突されない防衛運転、追突を誘発するような運転をしないことで防ぐとともに、家族を含めた交通安全教育を広め、危険を予測した運転、子ども、高齢者を含めた防衛運転につなげることで、事故『ゼロ』を実現したいと考えている。

今年の管理監督者研修で「あやとりぃ」を採用したのは、「子どもと高齢者の行動特性を知ることで、危険を予測した運転につながる。プロドライバーとしてこうした試みを知ることから防衛運転へつなげる視点を見つけていく。それから家庭での教育につなげていきたい」という期待をこめている。「安全協議会であやとりぃ教育ができるようになっていくといいと思っています」。安全協議会の活動は、各社のドライバーをはじめ社員から、その家族、そして地域社会へと広がっていくことが期待される。